

れている。そのうち、3基4個体については土器の埋められていた土坑が確認されたが、残りの8個体については土器がほぼ完全な形か、もしくは押しつぶされた形で検出されている。

調査担当者が特に注目する点は、11個体の土器にススの付着が認められること、土坑の掘り方が土器より一回り大きく土器を埋納するだけの大きさであること、12基の土器埋納遺構は調査区全体の標高が最も高い場所の一角に所在することである。この点は埋納土器の意義を考察する上では重要な視点である（鹿県埋セ2000）。

城ヶ尾遺跡では、柁ノ原式土器（塞ノ神A a式土器）の深鉢形土器1個と壺形土器3個の完形土器がそれぞれ単独で土坑内から出土している（児玉1998）。いずれも口縁部を上にして直立した状態で埋められていることが確認されている。本遺跡では、4個の埋納・埋設土器のうち、1個が深鉢土器であり、深鉢形土器が埋納された点は特に注目された。3個の壺形土器の文様は、柁ノ原式土器（塞ノ神A a式土器）にみられる沈線文と微隆起線文をそれぞれ単独に抽出し、2個が沈線文を、1個が微隆起線文を口縁部から肩部へ施文したものである。沈線文を巡らす壺は3本を1セットとする沈線文を少なくとも6段巡らし、それぞれのセットを曲線文で結んでいるタイプである。微隆起線文を巡らす壺は、口縁部が円形を呈するものの、胴部は楕円形となり大きく外側に張り出している。そのため、底部も円形でなく小判形を呈している。微隆起線文は螺旋状ではなく、3本、4本、5本をセットとして環状に巡らしている。胴部は無文である<sup>3)</sup>。

## （2）宮崎県の出土例

宮崎県の壺形土器の出土分布は、これまでの発見では大淀川以南の宮崎県南部地域に限られている。

柁ノ元遺跡の縄文時代早期の土器は、吉田式・前平式土器を主体として押型文土器・手向山式土器・平格式土器・撚糸文土器などが出土し、I～XIII類に分類されている（田野町教委1986）。

そのなかで、壺形土器に該当するものはX類であり、「撚糸文を施文する壺形土器」として他の土器型式とは区分して扱っている。器形は、頸部から口縁部へは内傾し、口縁部はそのまま直上気味におわる。この土器についての詳しい説明はみられないが、出土分布図をみると5片の出土（同一個体？）がみられ、近辺からはI-c類（口縁部が肥厚し、口唇部は内傾する。外面に山形押型文土器を縦位に施文。）とXIII-c類（頸部は無文。肥厚部に幾何学的凹線文。）が出土している。

都城市荒ヶ田の土砂採取場から小学生によって採集されたものが下藺遺跡例で、手向山式期に属することが報告されている。高さ47cm、胴最大直径30cm、口縁部径9.3cmを測る壺形土器で、底部付近は若干不明であるがこれまでのところ最大の器体を呈する土器である。口頸部から肩部に

かけては沈線文が施文され、それ以下の胴部には山形押型文が施されるものである。器形は山江村出土に類似するもので押型文系土器の手向山式土器期に属する壺形土器では最も古い時期に位置づけることができる（都城市教委1989、同市教委1992）。

漆野原遺跡の壺形土器は、大正6年以前に発見され、宮崎神宮に奉納後、県立博物館設立後同館に寄託されたものである。同館では「弥生時代の壺形土器」として収蔵されていたが、最近岩永哲夫によって詳細な検討が行われ、縄文時代の壺形土器であることが判明した。壺形土器は、器高28.6cm、口径6.2cm、胴部最大径20.2cmの全くの完形土器である。文様は口縁部から肩部にかけて施文され、肩部以下は無文である。文様の組み合わせは、刺突のある突帯、刺突文、沈線文、波状文からなる。丸い刺突を施した突帯は口縁下、頸部の中央及び下位にそれぞれ横位に1条張り付け、文様帯を上下に二分割し、更に、4箇所の口縁部の波頂部から縦位に2～3条貼り付けることによって文様帯全体を八分割している。八分割した文様帯には沈線文、刺突文を全面に配し、二分割した上下の文様は対称的な雰囲気をもつ構成をなし、美的に調和している。このような文様の組み合わせは鹿児島県前畑遺跡に類似例があり、文様の特徴から平格式土器の壺形土器とすることができる（岩永1991）。

このように、縄文土器で全くの完形で採集されることは珍しく、完形のまま埋められていた可能性が非常に高い。

## （3）熊本県の出土例

熊本県の壺形土器の出土分布は、これまでの発見では人吉盆地内に限られている。ただ、熊本県中央部の瀬田裏遺跡の押型文土器期にもあるが、南九州の壺形土器の形態とは異なるため、分布域からは除外した。

高城遺跡は、縄文時代早期の土器は押型文系土器（山形文・楕円文）、手向山式土器、塞ノ神式土器などの各型式が報告されている。そのなかで「一略一尚、土器においては壺型を呈するもので手向山式土器系かと思われる。」と記述されている。口縁部内面の上部と外面に山形押型文（菱形文か）を施文しているもの、口縁部外面に菱形押型文（報告書では山形の向かい合わせ施文で菱形の文様との表現）を施文し、その下部には山形押型文を施すもの、外面に横方向に押し引きよる沈線文を施文するものなどである（熊本教委1988）。

城・馬場遺跡は、縄文時代早期の土器は、円筒形土器が1個体出土した以外は手向山式土器と壺形土器だけの出土である。円筒土器を除けば手向山式期の良好な単純遺跡である。

外面に山形文押型文を施文し、内面には間延びをした山形押型文を施すものや、外面に櫛引き（篋か？）による凹線文を施文するもの、外面に網目撚糸文を施文し口唇部に山形押型文を施すもの、外面、口唇部、内面に山形押型文